The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde における媒介としての身体

中　村　晴　香

はじめに

Robert Louis Stevensonは*The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde*（1886）の中で語り手に人の性質は「善と悪との混合体（... are commingled out of good and evil）」（51；九六）と述べさせている。[1] すなわち、Hydeとは Jekyll の「抑えることのできない享楽性（a certain impatient gaiety of disposition）」（47；九〇）を「別個の個体に宿らせる（be housed in separate identities）」（49；九二）ためにつくり出されたものであり、本来ひとりの人間が内包している一側面にすぎないのである。このようにスティーブンソンは、ハイドを完全な他者として存在させているわけではない。それにもかかわらず、作品の中ではそれを容認するような描写も同時に示しているのだ。「彼とわたしは言う。どうしてもわたしとは言えないのだ（He, I say — I cannot say, I）」（59；一一四）。このようなジーキル博士の言葉からも、ハイドはときに完全な他者としてその存在を確立しているということがわかるだろう。作品のなかで、さらには時代とともに築かれてきた独立したハイド像は上記の作者の言葉に鑑みると、必ずしも作品の本質的な役割に沿ったものとは言い切れないのかもしれない。しかし一方で、スティーブンソンはハイドをジーキルの一側面と位置づけながら、あえて名前と身体を与え、完全な他者として独立しているように描き出すことでハイドに様々な役割を纏わせることに成功しているとも言える。このような矛盾からは、物語におけるハイドの役割、とりわけハイドの身体が担う役割の重要性が見えてくるようである。

本論では、科学によってジーキルのために創り出されたハイドの身体がハ

イドのみならず遭遇する人たち全ての欲望を投影する器として記号的な役割を果たしているということをハイドの三つの身体的特徴から考察していく。

第一章　造られるハイド像

ハイドの身体的特徴のひとつには、それを形容できないということが挙げられるだろう。ハイドと出合う人々は皆がその見た目に嫌悪感を抱くものの、一様にそれを言い表すことができずにいる。ハイドの存在が初めて明らかになる「少女踏みつけ事件」[2] の目撃者 Enfield は、Utterson に「見たところ、どんなふうな男かね？（What sort of a man is he to see?）」（11；一四）と尋ねられた際、詳細な事件の様子については説明できるにもかかわらず、ハイドの風貌についての問いには曖昧に答えることしかできない。

> “He［Hyde］is not easy to describe. There is something wrong with his appearance; something displeasing, something downright detestable. I［Enfield］never saw a man I so disliked, and yet I scarce know why. He must be deformed somewhere; he gives a strong feeling of deformity, although I couldn’t specify the point. He’s an extraordinary looking man, and yet I really can name nothing out of the way. N0, sir; I can make no hand of it; I can’t describe him. And it’s not want of memory; for I declare I can see him this moment.”（11－12；一四）

エンフィールドはハイドの身体を「言い表せない」と語り、また、「どこが厭か」、「どこが奇形か」、そして「どこが異様か」それらのすべてをわからないと説明するのだ。エンフィールド同様、アタスンも初めてハイドを見たときには、彼の外見に戸惑いを感じている。アタスンはハイドの背丈や声に関して、捉えることのできる厭な特徴を挙げていくが、その説明は「このほかにまだ何かあるにちがいない」（17；二五）と自身で理解するほど不十分なものでしかない。このように、形容できないハイドの身体は、そのおかしさを指摘できないところにあるのだ。

抽象的なハイドの身体イメージは、曖昧であるが故に常に多様な情報に晒されるような無防備な状態であると言える。その結果、ハイドの身体にはとりわけ19世紀当時のイギリスで盛んであったダーウィニズム的退化思想の影響から、退化した人間、猿のようなイメージが付与されてきた。作品の中で、ジーキルの執事 Poole がハイドに向ける言葉にもそれは顕著に表れている。主人を殺したと考えるハイドを「人間だか、獣だか（him, or it）」（35；六三）、あるいは “creature” と呼び、それは「腰をかがめた（doubled up）」ような佇まいで、動きは「速く（quick）」「猿みたい（like a monkey）」（37；六七－六八）であったとする描写である。さらに、ジーキルもハイドの肉体に「不具と頽廃の跡（an imprint of deformity and decay）」（51；九六）を見出しており、ハイドの手は「痩せて筋ばって節が高く色が青黒く、うす黒い毛がもじゃもじゃと生えている」（54；一〇二）と説明する。形容できないはずのハイドの特徴は、退化の徴を印象付けるものに限り、説明可能なものとして描き出されている。そこからは、ハイドを進化しきれていない人間として位置づけるための意図を読みとることができるだろう。このような、「低い背丈」「素早い動き」「毛むくじゃら」といった特徴は当時のイギリスでは、「背丈の高い、立派なご体格」（36；六六）のジーキルよりも劣った人間であると、誰もが推し量ることのできるものであったように思われる。とりわけ、Cesare Lombroso が犯罪者に共通する特徴を先天的な身体特徴から見出そうとしたように、[3] 退化の徴は劣った人間の徴として犯罪者を始めとする、様々な社会規範からの逸脱者に向けられるものであった。進化や退化に対する敏感な注意が向けられていた時代において、身体の特徴が最たる関心事のひとつであったように、徴は言葉以上に多くの情報を与えるものとなり得ていたのだ。だからこそハイドの特徴を言い当てることに失敗するアタスンは「あの男はどうもこの世の人間とは思えない！」（17；二五）と自分とハイドとを切り離すことで、その繋がりさえも拒もうとしているのだ。友人で医師の Lanyon は、ハイドに抱く嫌悪の原因を「人間の本性深く横たわっているもので、嫌悪の原理というようなものよりも、もっと崇高な本質

に根ざしている（the cause to lie much deeper in the nature of man, and to turn on some nobler hinge than the principle of hatred）」（45；八四）と分析する。ラニョン博士が指摘するように、ハイドは人間の本性を写し出す存在であり、人間が何世代にも渡り歩んできた進化の過程の中に未だ残る未分化なものを想起させる存在として拒絶され、隔てられているのだ。

退化の徴は、人間とは根源的に違うという当時の明快な記号であり、形容できないハイドの身体が唯一纏うことを認められたものである。しかしながら、ハイドの風貌に退化の記号を与えるだけであれば、なぜ形容できない風貌にする必要があったのだろうか。明確に区別をつけたいのであれば、あからさまに猿と描写できるような身体を与えても良いようなものである。このテクストが出版された一〇年後の一八九六年、同様に科学によって身体変化を生じさせた作品 H. G. Wells による *The Island of Doctor Moreau* では、動物を人間に強制的に進化させる様子が描き出されている。突発的な変化を遂げた動物人間たちは、結局、本来の流れである進化に抗えない結果、退化へとずり落ちていくが、この作品では退化を印象づけるためにより鮮明な動物的特徴を描き出している。対して、ジーキルのハイドへの変身は内なる悪を晒したいという欲求のため自ら望んでディジェネレイト（退化）した結果引き起こされたものである。加藤氏は、『D. H. ロレンスと退化論―世紀末からモダニズム―』の中で、「退化した者（degenerate）」とは本来、生存闘争によって決定されるべき「行き延びる者（適者）」と「闘争に敗れる者（不適者）」という区別が「あたかも生まれたときから遺伝的に異なる存在であるかのよう」な意味のずれを纏い、それが「さまざまな種類の弱者あるいは不適者を退化した者として総称的に分類する機能をもつようになった」と指摘している（加藤７－８）。そのような総称の中で、判然たる特徴がないハイドの身体は、より多様な社会的逸脱者たちをそこに重ね合わせることを可能にしていると言える。形容できないハイドの身体とは、善良な紳士であるジーキルと悪人のハイドという善と悪とを際立たせるために持ち出された仕掛けではないだろうか。ハイドの身体は、この構図を通して万人が解りやす

くイメージするために用いられる一種の装置のように思われるのだ。それは、ハイドの持つもう一つの特徴からも明らかである。

第二章　ハイドという器、変容する身体

「カルー殺害事件」[4] 犯の人相書を用意する際、ハイドの目撃者たちによって語られる彼の印象は、「甚だしく相違（differed widely）」（24；四〇）したものである。一致しているのは、「見るものの目に、なんとも言いあらわしようのない、畸型の感じをしつこく植えつけたという点」（24；四〇）だけである。従ってハイドの身体とは、人に厭な感じを与えるものでありながら、その姿は見る人によって自在に変化するものということになる。ここから、ハイドの身体に与えられた新たな役割を読みとることができるだろう。

誰の目にも違うように映るハイドの身体は、言い換えれば受け手に合わせて変化させられていると言える。例えば、エンフィールドはハイドを目撃した後、ジーキルとハイドの関係を「ゆすり（Black Mail）」（10；一二）によるものと断定し、以下のように述べている。

> "Yes, it's a bad story. For man［Hyde］was a fellow that nobody could have to do with, a really damnable man; ... Black mail, I suppose; an honest man paying through the nose for some of the capers of his youth. Black mail House is what I call that place with the door, in consequence."
>
> （10－11；一二）

このエンフィールドの指摘が、ホモセクシュアリティへの言及であるということは疑う余地はないだろう。当時、同性愛行為を違法であるとするラブシェール修正条項により同性愛的行為はゆすりの対象であったからだ。さらにエンフィールドがハイドの通るジーキルの家の裏戸を「ゆすりの家（Black mail House）と呼ぶことにした」とする描写も同性愛者が集う場である「モリーハウス（The Molly House）」[5] を連想させるものである。Elaine Showalter は *Sexual Anarchy* の「ジーキルの小部屋」と題した章において、この作品

が醸し出すホモセクシュアルな様相を丹念に考察している。そのなかでショウォールターは「世紀末は文学と性における二重性の黄金期であった」（Showalter 106）と指摘しているが、この作品が提供するジーキルとハイドというダブルの性質あるいは生活はまさにうってつけの題材であったように思われる。世紀末において人が有する多様な側面というものはそれ自体が、同性愛であるということを示す証拠になり得たのだ。エンフィールドは性的対象として「誰ひとり相手にしそうもない」ハイドをジーキルの同性愛の対象として考えているのだ。

さらに、主人のジーキルが殺されたかもしれないと訴えるプールは、ハイドを殺人犯と見なしている。書斎に閉じこもる犯人らしき人物の筆跡がジーキルのものと一致していることをアタスンに指摘された際には、「書いたものなんど、別にたいしたことでもないじゃございませんか…わたくしは、この眼で、ちゃんとあいつめを見たんですから」（36；六四）と言い、プールが筆跡よりも目で見たものを重視しているということがわかる。そうであれば、ハイドはその外見によって犯罪者と結びつけられており、そこからは前章で述べたロンブローゾの犯罪者のイメージを読みとることができるだろう。

また、プールのこのような訴えを払拭するように持ち出されるアタスンの仮説からは、ジーキルの病気の可能性が示唆されている。

> “but I［Utterson］think I begin to daylight. Your master, Poole, is plainly seized with one of those maladies that both torture and deform the sufferer; hence, for aught I know, the alteration of his voice; hence the mask and his avoidance of his friends; hence his eagerness to find this drug, by means of which the poor soul retains some hope of ultimate recovery....”（36；六五）

アタスンがジーキルの変化を病気と位置づけるとき、そこには性病による身体の変化、とりわけ外見に明らかな変化をもたらす梅毒による影響を考えざるを得ない。Sander L. Gilman は、外見の美しさと善き内面、そして外見の醜さと悪しき内面という既にヨーロッパで流布していた考え方から「美しさ

と醜さの二項対立（dichotomy）は一九世紀と二〇世紀の健康と病気のすべての文化的な構築に備わっているように思える」（Gilman 54）と指摘している。ここから、一九世紀のイギリスに既に深く根ざしていた身体の美しさや醜さにまつわる価値観を推察することができるだろう。ジーキルが病気を煩ったために外見の変化が起こったと捉えることは、実際にはその変化がハイドへの変身であるため、ハイドの身体の醜さを指摘していると言える。

このようにハイドの身体は、上に述べたような様々な要素を各人に読みとらせることを可能にしている。それは、各々が抱える欲望をハイドに投影した結果ではないだろうか。ハイドの身体に同性愛の欲望を読みとったエンフィールドは、男性のアタスンとの日曜の散歩を何より大切にするような男性であり、また、ハイドを目撃したのも、明け方の三時頃「おそろしく遠いところへ行った帰り道（some place at the end of the world）」（９；八）のことである。ここには紛れもなくエンフィールド自身の同性愛的嗜好が仄めかされていると言えるだろう。また、ハイドの身体を性病と結びつけたアタスンはハイドが起こした最初の事件を聞いた後、以下の様な妄想をする。

> He would be aware of the great field of lamps of a nocturnal city; then of the figure of a man walking swiftly; then of a child running from the doctor's; and then these met, and that human Juggernaut trod the child down and passed on regardless of her screams. Or else he would see a room in a rich house, where his friend lay asleep, dreaming and smiling at his dreams; and then the door of that room would be opened, the curtains of the bed plucked apart, the sleeper recalled, and lo! there would stand by his side a figure to whom power was given, and even at that dead hour, he must rise and do its bidding.
> （14－15；二〇）[6]

前半は、彼がエンフィールドから聞いた事件の様子そのものを回想しているだけのようではあるが、徐々に聞いてはいないアタスン自身の欲望がもたらしたであろう想像が挿入されている。彼の寝室に入ってくる男性という想像

に、性的な解釈が含まれていることは言うまでもないだろう。また、使用人である執事のプールがハイドの身体から犯罪を連想することは、実際に起きた「カルー殺害事件」の目撃者が同じく使用人の「雇女（a maid servant）」（21；三三－三五）であったことからも何ら不思議なことではないだろう。

ハイドの身体は、曖昧にされていることで受け手の興味や欲望を映し出す鏡のような役割を果たしている。この身体は、そもそもジーキルの欲望のために作り出されたものではあったが、ジーキルの欲望だけではなくハイドに出合う全ての人たちの欲望をも映し出しているのだ。そこには各々が抱える欲望を受け入れ、如何様にも変化する器としてのハイドの存在が見えてくる。スティーブンソンは、登場人物たちそれぞれに異なったハイド像を描写させることで、ハイドの身体を彼らの欲望を反映する鏡として、また、それらすべてを包括する器として描き出している。このようにハイドの変容する身体イメージは、人間が多様な側面を元来抱えた存在であり、それはジーキルだけではなく誰しもが抱えているものであるということを浮き彫りにしているのだ。誰しもが抱える秘密の欲望を映し出すハイドの身体は、それを介することで作品の更なる魅力をも映し出している。ハイドの身体が持つ最後の特徴はそのことを鮮明に描き出している。

第三章　魅力的な身体

ハイドの身体は嫌悪を抱かせるものではあるが、同時に興味を惹き付けるものとしても描き出されている。エンフィールドはハイドが通う戸口を「あの家については自分で調べて見ましたよ（I have studied the place for myself）」（11；一二）とジーキルに対しての詮索を否定しながらもハイドについての詮索は躊躇わない。また、ラニョン博士は薬品を受取りにきたハイドに「募りゆく好奇心（growing curiosity）」（45；八六）を感じている。さらにアタスンは、ハイドの存在を聞かされてからというもの「本物のハイド氏の顔を見たいという、特別に強い、異常ともいうべき好奇心（a singularly strong, almost an inordinate, curiosity to behold the features of the real Mr.

Hyde)」(15；二〇）を抱き、結果「あいつが“隠れ役”なら、おれは“探し役”になってやる（If he be Mr. Hyde, ... I shall be Mr. Seek)」(15；二一）と宣言するまでに至る。ハイドはこのように、皆の好奇心を駆立てるような存在であり、常に追いかけられる存在なのだ。

怪物物語として一九一八年に Mary Shelley が描いた *Frankenstein* の怪物も創造主であるヴィクターに追われ、また Bram Stoker の *Dracula*（1897）のドラキュラ伯爵もヴァン・ヘルシングをはじめとする男性たちに追いかけられる存在である。ここからは、怪物が何かしらの興味を惹きつけるような対象であることがわかる。しかし、フランケンシュタインの怪物やドラキュラ伯爵が殺すことを目的に追われるのに対して、ハイドが追われるのは復讐や恨みといった類いのものではなく単に強い好奇心によるものである。ハイドと出合う人々皆が彼を追うのは、その正体を知りたいという単純な好奇心からなのだ。欲望に人が抗えないように、欲望そのものであるハイドは人々の好奇心を刺激しながら追われる対象として存在しているのだ。さらにこの追跡を可能としているのが、身体である。内に秘められた人の欲望は、ハイドという身体を纏うことではじめて追跡可能なものとなる。このようにこの物語が、ハイドを捜すという追跡物語、あるいは探偵物語の要素を含んでいると考えるとき、スティーブンソンがハイドに託した更なる役割が見えてくるように思う。この物語は、ある人間が内に抱えているある人間の側面を変身という形で提示すだけのものではない。ハイドの身体が人の好奇心を駆立てるものだという点を踏まえて考察していく。

この物語のなかで、ハイドは追われながらも、彼を追う登場人物たちによって、ある面では常に守られている。その理由は、ジーキルの名誉のためである。ジーキルとハイドの繋がりは、幾度となく広まりそうになるものの、そうはならない。その度に、約束、あるいは隠蔽が行われるからだ。「少女踏みつけ事件」の際には、アタスンは戸口の情報をエンフィールドに隠し、エンフィールドもハイドが少女の家族に渡す小切手に書かれた名前を明かすことはしない。さらに、「カルー殺害事件」の凶器であるステッキがジーキ

ルのものであることをアタスンは警官に伝えない。また殺人犯の筆跡がジーキルと似ていると指摘する書記の Guest も「他言無用」(28；四七－四八)とアタスンから言われるとそれを容認し、ラニョン博士に至っても、彼の死を誘発するほどのショックな出来事であったにも関わらずジーキルとハイドの真相を直接語ることはない。このように登場人物たちは、ジーキルそして結果的にハイドにまつわることに関して、言わないことを執拗に約束し合うのである。ここに、ヴィクトリア朝時代の人々が世間体を保つために「実際の自分より善いように装う」(Houghton 404) 姿を「道徳的偽装」と呼んだ Walter E. Houghton の指摘が思い起こされる。厳重に封がされた封筒を押入ったジーキルの部屋で見つけたアタスンはプールに「おまえの主人が逃げたにしろ、死んだにしろ、とにかく名誉だけは傷つけずにすませたいものだ」(41；七七) と伝える。この言葉から解るように、名誉を重んじる当時の社会のなかで最も恐れるべきは不名誉が世間に知れ渡ることである。エンフィールドが「少女踏みつけ事件」を語る際、「怪しく見えれば見えるほど、なおさら穿鑿はしないことだ」(11；一三) と自身の主義を語り、アタスンもそれに対して「きみの主義は、あれはいい主義だよ (that's a good rule of yours)」(11；一三) と述べている。ここで示される主義こそがまさしくハイドの身体を介することで見えてくるテーマではないだろうか。

ハイドは追われると同時に守られる存在である。それは、ハイドの身体によって具現化される欲望がそもそも誰もが持ち得ているものだからである。ハイドがジーキルの一側面であるように、また、ハイドが皆の欲望を映す存在であるように、人は誰しもがハイドを抱えているのである。この作品は、そんな誰もが持つ秘密、あるいはプライベートな領域に好奇心によって他人が許可なく踏み込むことへ警鐘を鳴らしているのではないだろうか。事実、ハイドの正体を確かめようと無理矢理ハイドの書斎に押入るアタスンとプールは、攻撃者を意味する "The besieger" (39) と描写されている。ジーキルはアタソンに「きみにしてもらえることは、たったひとつ、きみが沈黙を尊重してくれることだ」(30;五二) と伝えるが、その願いも空しく、結局ジー

キルの書斎の扉はアタスンの暴力的な好奇心によって破られてしまうことになる。好奇心によって他人の領域に踏み込むことで得られるものは、ジーキルの最後が示すように自殺という壊滅的な結果しかないのである。[7] ジーキルの書斎に残された鏡を覗き込む二人が「かがみこんで（stooping）」（40；七五）いる姿は、まるでハイドのようであり、二人の行動が悪とみなされていることが明確に提示されているかのようである。また、鏡に映し出される彼らの表情の変化は、暗にハイドの身体同様、彼らの内なる悪い側面が外に現れ出た瞬間を示しているのかもしれない。

おわりに

「身体はただ骨がつまった袋というだけのものではない。豊かな表現の媒体なのである」（Porter 35：四一）。と Roy Porter が指摘するように、この作品の中で、ハイドの身体は様々な記号的役割を担っている。時代的要請、人の欲望、そして道徳の問題がハイドの身体を介し読者に読みとられていくのだ。スティーブンソンは人の一側面に身体を与えることでそれを具現化し、名を与えることで一人の人物のように扱うことに成功している。この大胆な設定によって現在も尚、この作品を基にしたアダプテーション作品が私たちの目に触れることとなる。また、ジーキルとハイドというこのひと繋がりの言葉は、二重人格の代名詞として用いられるほど今日では広く定着し、この言葉を聞くだけで対象人物の性格を容易に想像させることができるものとなっている。このように作品のなかで、さらには時代とともに築かれてきた独立したハイド像は、原作とは異なる様相を呈することもある。また、物語の外においても、ジーキル博士とハイド氏というタイトルに冠した二つの名前は、一個体としてのハイドを強調する一因となっているのかもしれない。ハイドは一見すると別の人格のように扱われがちであるが、あくまでジーキルの内面の一側面である。

この作品は当時のイギリスに退化や同性愛といった社会規範からの逸脱への懸念を想起させる恐怖をもたらした作品である。しかし同時に、当時の価

値観を非常に反映した作品であるとも言える。それは、ジーキルとハイドに明確な身体の差を与えることで、善と悪という解りやすい境界を設けた作品であるからだ。ジーキルからハイドという変身は物語の内部でジーキルが「見破ることのできないマントを身にまとっているわたしは、完全に安全なのであった」（52；九九）と語るのと同様に、読者にも悪との線引きを可能にしている。このことによって読者は、恐怖を抱きつつも、隔てられた善悪に安堵したのではないだろうか。作品自体にはそれらを曖昧にする、あるいは覆すような境界の区分不可能性を示す巧妙な仕組みがなされているものの、ジーキルとハイドが持つ解りやすい身体の別はそれを許容する余地を与えているのだ。作中でハイドに魅せられた登場人物たちのように、ハイドの身体は、今度は現代の読者から新たな「捜し役（Mr. Seek）」を生み出してしまう、そんな魅力を放ち続けているように思われる。

注

1　頁数のアラビア数字と漢数字の併記については、漢数字を翻訳本の頁数を示すものとする。

2　テクストの “Story of the Door” の中で語られる、Enfield が目撃した事件のことである。

3　この議論については、Gleenslade の *Degeneration, Culture and the Novel 1880－1940* の第五章に詳しい。

4　テクストの “The Carew Murder Case” の中で Sir Danvers Carew が Hyde によって殺される事件である。

5　この点については、Alan Bray の *Homosexuality in Renaissance England* の第四章、Eve Kosofsky Sedgwick の *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire* の第五章に詳しい。

6　テクストの注にもあるように、ここでアタスンがみる夢は、*Frankenstein* の場面を想起させるものである。怪物を造り終えた悪夢で目覚めた Victor が見る怪物の場面である。

7　この点に関して、Elaine Showalter は自殺がゲイゴシックに相応しい唯一の結末と考えられていたことを指摘している（Showalter 113）。詳しくは、*Sexual Anarchy: Gender and Culture at the Fin de Siècle* の第六章を参照。

参考文献

Bray, Alan. *Homosexuality in Renaissance England*. London: Gay Men's Press, 1982.

Gilman, Sander L. *Health and Illness: Images of Difference*. London: Reaktion Books, 1995.

Greenslade, William. *Degeneration, Culture and the Novel 1880－1940*. Cambridge; Cambridge UP, 1994.

Houghton, Walter E. *The Victorian Frame of Mind, 1830－1870*. New Haven and London: Yale UP, 1957.

Porter, Roy. *Bodies Politic: Disease, Death and Doctors in Britain, 1650－1900*. London: Reaktion Books, 2001.（『身体と政治―イギリスにおける病気・死・医者，1650－1900』目羅公和訳、法政大学出版局 2008年。）

Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. New York: Columbia UP, 1985.

Shelley, Mary. *Frankenstein*. 2nd ed. Ed. J. Paul Hunter. New York and London: W.W.Norton & Company, 2012.

Showalter, Elaine. *Sexual Anarchy: Gender and Culture at the Fin de Siècle*. London; Virago Press, 1990.

Stevenson, Robert L. *Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde*. New York: W. W. Norton, 2003.（『ジーキル博士とハイド氏』田中西二郎訳、新潮社 1967年。）

Storker, Bram. *Dracula*. New York and London: W. W. Norton & Company, 1997.

Wells, H. G. *The Island of Doctor Moreau*. London: Penguin Books, 2005.